

沖

俳句雑誌「おき」

10月号

沖 発行所

二〇二〇年

送り酒

能村 研三

西 日 中 時 間 貧 乏 楽 し め り

天 金 を 割 つ て 出 で た る 雲 母 虫

板 塀 の 木 理 す る ど き 帰 省 か な

廃 校 に 校 歌 碑 の こ り 蟬 時 雨

九月八日の未明に二〇二〇年のオリンピックの東京開催が決まった。私は前日が中央例会、この日は東京例会と本部例会が続くのでいつもより朝の目覚めが遅かったが、家族が皆テレビの前でフエノスアイレスからの中継を見守っていた。私もどうかその決定的瞬間に間に合ったが、IOC会長が「TOKYO」と書かれたカードをかざしながらのシーンは嬉しかった。

地震や津波そしてこのところの異状気象など未来に不安を募らせることはかりで暗い思いがあったが、七年後という近い未来に何か明るい兆しが見えてきたようだ。私にとっての七年後を考えた時、年齢的には七十歳の古稀を迎える。おそらくは公務の仕事は全てけりをつけ完全な専門俳人になつていることだろうし、今からその時期を思い描いただけでも何か期待が膨らむ。

テレビの表況を見ていてしばらくして、この「二〇二〇年」が「沖」の創刊五十周年そして六百号になる

手を回し内鍵開ける盆休
霧降るや行く手そびらに舵手鋭声
隠沼に小灯り点すひつじ草
猪独活の峠照り降り繰り返す
下戸されど送り火前の送り酒
潜むには足らざる丈の青芒

※一部「俳句」掲載句

年であることがわかった。「沖」は昭和四十五年、一九七〇年の十月の創刊であるから、この時が「沖」にとっても大きな節目になる。

「沖」の記念大会はおそらくは十月頃を予定することになる。「沖」の会員諸氏も全員が元気でこの年を迎えるよう健康に留意されることを望みたい。

少し気の早い話になったが、五十年の前にも再来年の二〇一五年、平成二十七年の十月に「沖」は四十五周年を迎えることになり、「沖」の常任幹事会ではその準備が始まった。記念号、記念大会に加えて、「沖」の二十周年、三十周年の折に刊行した歳時記の編纂を考えている。詳細については来月号に告知の予定であるが、十五年ぶりの「沖」会員の珠玉の作品が並ぶ歳時記ができることは皆さんの句作の指針にもなることから大変有意義なことと期待している。

能村 研三

蒼茫集



放課後

田辺博充

わくらばや天寿平等にはあらず
ルービックキューブの青は夏の海
忘れざるかの放課後の雲の峰
天道虫おのが宇宙を背負ひたる
篋のざわめき夙に秋立てり
広島忌ふと太陽の恐ろしき

宮相撲

広渡敬雄

富士講とともに高きに登りけり
葉月潮鯨塚まで到りけり
手も足も挽がれし土偶草の花
恐竜の骨鳴りにけり星月夜
赤みます男の臀いじま宮相撲
食べ頃は月光に聴けラフランス

盆の月

宮内とし子

金盞納戸より出す祭の夜
膝抱きゐる送り火の消えし後
奥飛驒の石置き屋根に盆の月
からだよく働きし日の黒葡萄
黒々と山迫りくるぶだう棚
一分を長きと想ふ終戦日

打水

小山田子鬼

水打つてあそびごころを引き立たす
胸に来て悪びれもなく天道虫
またもとのおのれに戻る虹のあと
遠くまで闇がふくらむ虫の声
暗くなるほどくちなしの香となれる
好きなだけ鳴らし風鈴仕舞ひけり

移ろふ季

秋葉雅治

追へば白き火群となりて螢の夜
ためらひも決断もありサンゲラス
総身を玉と濡らして跳人跳ね
暑中より残暑に変はる味噌の味
高所恐怖捨てて巨塔に夏惜しむ
海霧のぼる崖の垂直草田男忌

砌

辻美奈子

不器用に育てて胡瓜真直ぐなる
砌とふ文字ありなんとなく涼し
大棧橋外国船の秋暑かな
八月やキリンレモンに泡しきり
生家なし木槿むらさき咲き余し
野の花のごとしよ初秋の薔薇は

棚経僧

菅谷たけし

かの童棚経僧として来たり
一雨後のかなかなの声透きとほる
飛行船残暑がすみに浮かびたり

摩天楼残る暑さに影絵めく
神輿舁き草食系の一変す
篝榻足してありあり鶉の手綱

晩夏光

森岡正作

ソラマチにまづ再会の生ビール
灼くる都市ぐるつと塔の居丈高
高層群灼けに灼けぬて発光す
岩もまた波の形に島晩夏
釣舟の明日の出を待つ晩夏光
かざす手の祖霊に触るる踊の輪

差し出しぬ

千田百里

心太ときどき夫が饒舌で
瓜刻む居間へ小言を投げながら
残党のやうな紫煙派巴里祭
大き虚^{うろ}連ねて土用波の来る
ソラマチ^{東から西へ}秋暑エスケーター行脚して
白帝へ火照るタワーを差し出しぬ

一 発 目 甲 州 千 草

夏蝶のふいと乗り来る内房線
向日葵の奥の牛舎の昼の闇
塔は凜高さ暑さを従へて
わいわいと天空の階盆霞
吟醸の封切る花火一発目
貼紙の音なく落つる夕立あと

会 話 林 昭 太 郎

片陰の途切れて会話とぎれけり
崩るるも育つも無音雲の峰
夏草や引込み線にタールの香
目玉ソラマチ焼片目崩れて朝ぐもり
ソラマチとふ立方体の街に秋
白粉花や大きな塔の見える路地

老の時間 千 田 敬

滝四段白変幻の衣展べて
筑波嶺や葉月の日の斑たゆたうて
雲の峰流浪の夢は捨て難し
飲食の顛頂に汗の流れみち

いまだ炎帝在し六三四発火点
星今宵老の時間は煙のごと

貝の殻 荒井千佐代

蚊柱を払ひて仰ぐ大赤秀
赤秀樹の洞や気根や大夕焼
遊船の銅鐸を打ちては折り返す
潮枯れの椰子の並木や避暑地去る
秋立てり流木・藻屑・貝の殻
切株に沖見てをれば燕去る

黒日傘 杉本光祥

蓮見舟不粋な客と乗り合はす
さうめんの赤き糸をうばひ合ふ
母送り寧らぎ得たり盆の風
峰雲へラジコン飛行機急上昇
禿頭のやをらに差せる黒日傘
タクト振り下ろすごとくに夕立来る

絶对多数 楠原幹子

蟬の羽化声を殺して兄おとと
年寄の知恵もいくらか葎の花

三伏のこめかみぎゆつと押へけり
屑といふ絶体多数の金魚かな
反抗期老いにもありて蠅を打つ
灼け石を残して家の毀たるる

透明な檻

望月晴美

水といふ透明な檻水中花

絵団扇の風と語らふ「安房」のこと

青芝や垣千葉城守七くを作らぬ父母の墓

風薫る丘のま中は県境

急流のはじき出したる藻屑蟹

青空へ口つけて飲むラムネかな

家系図

頓所友枝

遠雷や家系図横に拡がらず

籐寝椅子答はいつも胸のなか

返事待つ時間のやうな朝曇

日雷暗証番号また忘れ

対策の際をつかれし日焼かな

呑み込むに少し手間どるけふの秋

さばさば

細川洋子

引き潮のやうに夏負けしてをりぬ

帚草空気さばさばしてゐたり

パラボラの大きいなる皿星涼し
風鈴やバリアフリーの母の家
かき氷だんだん角の取れてきし
ジャグジーに揉まるる髪膚雲の峰

涼しさよ

大川ゆかり

宇宙儀の星座数へる涼しさよ

星涼し口笛を吹くまだ吹ける

米茄子のたいくつさうに太りたる

身のうちに風鈴の音の溜まりゆく

次のバスまでせみしぐれ蟬時雨

食卓に花一輪や今朝の秋

富士詣

安居正浩

横丁といふ風鈴の鳴るところ

自転車で行く駒込の富士詣

甚平にある江戸の世の風通し

羽目外す分だけ乱れ宿浴衣

八月や高い所が大好きで

衛星の月に地球と他人説

潮鳴集



ひじき煮

石田

静

死ぬる日は生る日に勝る遠花火
空蟬を子に持たせやる旅始
腹這ひで描く出目金の長睡毛
ドアノブに小さきメモと大茄子
おふくろのひじき煮所望盆帰省

残

暑

七種

年男

ラムネのむ喉に断層生まれけり
網膜を刺すビル窓の残暑光
影を売る如く日傘の売られをり
夏痩せのせり上がりゆく昇降機
駆け寄りてビラ渡さるる残暑かな

お風入

柴田近江

文晁の雀翔つやもお風入
地獄絵の狂炎抜けて紙魚走る
百合化してチャペルの鐘に蝶となる
ビール乾し恋の話にはづみつく
向日葵にくるり背をむけ反抗期

まだここに

栗原公子

夏大根のこされし身に活を入れ
ふと夫に声かけてをり夜の秋
水打つや帰り来る人あるやうに
まだここに掛けおく夫の夏帽子
初秋や星座の切手で着く手紙

沖作品



能村研三選

市川市

平城 静代

四万六千日麦飯しかと嘯みしむる
迷路めく路地風涼し荷風の居
薔薇の棘ありてこそばらの矜持かな
夏旺んぱりぱりと子の咀嚼音
かぶりたき水木洋子の夏帽子
夏霧や時間といふは逃げやすき
麦とろをつるりと四万六千日
ライバルは常に良き友凌霄花
大夕立一村分けて通りけり
うかうかと瓜太らせてしまひけり
布を織るやうに色づく秋野かな
草の花伏流水の音がして
引潮に縞をなす砂秋思かな
曼珠沙華畦ごとに燃え一揆の地
大豆引く背に山影の移ろへり

岩手

高橋 和枝

板橋 昭子

山形

佐藤 淑子

天の川逢瀬は何時も星こぼす
蝶 凶鑑 求め 晩学 樂しめり
ハンモック夢も希望も宙ぶらりん
撫子や夢二の描く乙女の瞳
鳥海の西施の合歡の蕾かな
峰雲や富士登拜の千回碑
広島忌誓ひを読みし千は母に
山梔子の白き陰翳ピエタ像
晩夏光メタセコイアの梢さやぎ
かなかなや遠的白く鎮もりて
枇杷包む和紙やはらかに退院日
金魚玉ふたりの黙を翻へし
沖晴れの一日を煽る安房うちは
夕焼や沖に明日の力満ち
水路閣てふ明治の遺産涼しかり

千葉

石崎 和夫

小河原清江

沖作品 15句選評

* 誌誌誌

四万六千日麦飯しかと噛みしむる 平城 静代

平城さんは、浅草生まれの江戸っ子。その浅草寺境内の裏手で七月九日と十日にはほおずき市が行なわれる。この日の功德は千日分と最も多く、「千日詣」とも呼ばれていた。浅草寺では享保年間ごろより「四万六千日」と呼ばれるようになり、そのご利益は四万六千日分に相当するといわれるようになった。この数については「米一升分の米粒の数が四万六千粒にあたり、一升と一生をかけた」などという諸説がある。こんなことから麦飯につながってきたのかも知れない。いずれにせよ、麦は白米よりも栄養価が高く、麦飯には様々な病気を予防する効果があると言われている。

夏霧や時間といふは逃げやすき 板橋 昭子

以前私は「時間貧乏」という句を作った。昨今の都市生活ではある意味で「時間貧乏」の生活をしないとおいていかれてしまうことがある。板橋さんも市川の梨農家で、梨の花が咲く頃

から収穫時期の頃までは、いくら時間があっても足りない生活を送られている。うまく時間をつかわないと、するりと逃げていつてしまう。それをマイナスに捉えるのではなく、限られた時間の中でその充実ぶりがうかがえる。

布を織るやうに色づく秋野かな 高橋 和枝

秋野は花野と同じように秋の花が咲きみちた広々とした野や高原を指す。花々が澄んだ光のなかで揺れ、まことに明るく広大な野だが、そこにはどこもなく秋ゆえの淋しい感じも漂っている。神様が広い野原で布を織っているようなやさしい色づきようである。

天の川逢瀬は何時も星こぼす 佐藤 淑子

「逢瀬」は、古い言葉だが、現代風には「逢引」のこと。源氏物語で、光源氏が想いを寄せる女性の家に人目を偲んで通う場面などが「逢瀬を重ねる」などという。天の川という表現はあたかも流れている川のように捉えられている。逢瀬のひそやかな時を羨むように天の川から星がこぼれ出た。

山梔子の白き陰翳ピエタ像 石崎 和夫

山梔子は初夏に咲く花だが、花の命は短くて、雨にあたれば花びらが茶色になる。初夏とはいいながら夏至近くの陽射しは葉陰の陰翳が色濃く、だからこそ花の自さを際立たせる。この色からローマのサン・ピエトロ大聖堂のミケランジェロのピエタ像を想像した発想はさすがだ。

(以下略)